

ある。政治家に献金するということは、何らかの下心がある場合が多い。但し政党はあるルールの下に自由に献金を受けることができるが、地方支部で処理することは禁止し、党本部に集約し、本部は都道府県連合会に配分し、都道府県連合会が各支部の面倒を見ることにする。このようにすれば政治は相当浄化されると思う。政党のみが献金を受け得ることになれば派閥は力を失うこと必定である。政党の定義は識者の意見も聞いて再検討すればいい。

国会議員にとつて最も負担の大きな出費は人件費である。選挙区の人件費は誰しも多額である。選挙民は横暴である。結婚式、葬式、起工式、竣工式や陳情の現地視察、中には地域の宴会にまで呼びつける挨拶廻りも大変である。代議士先生も小選挙区制になつてからは正に村会議員並である。「国会議員がキメ細かに地元活動するので往生するよ」という県議会議員のボヤキも笑えない。それ程多用なのだか

ら公設秘書を十人位認めてもよいと思う。但し十人分の枠で渡し、それで何人雇つてもいいが、全員国会に登録し身分証明書を持たせ公務員としての規律を守らせ、また議員一人当たり三枚程度の秘書用パスを与へて政治活動や上京の用に供せしむる。公設秘書十人分の給料には現行の政党助成金を当てればよい。大体相当額であるはずだ。

電話代も馬鹿にならない。議員会館と地元の事務所に送信用の公設電話を一台ずつ設置してやつてもよいだろう。地元の事務所にはわざわざ長距離電話をかけに来る不届者も案外多いが選挙のことを考えると断ることもできない。月額百万円の文書通信交通費もある程度増額して政治活動費とし、立法事務費月額六十五万円も個人に支給すればよい。この事務費は現在政党に渡されているものだ。もちろん、金集めの「励ます会」は禁止することだ。地元の事務所を政党支部の中に設置するのも一つの知恵だろう。いずれに

しても国の負担は増えるが、政治をキレイにするためのコストだと考えるべきだろう。

問題は新人である。難しい問題だが、立候補の意志を固めた時から立候補予定者として扱わねばなるまい。確かに新人には不利で立候補しにくくなるから充分検討する必要があることは当然である。選挙もでき得る限り公営にすることだ。但し種々雑多な人々が立候補するのだから公営の基準は慎重に決めるべきだ。

いずれにしても「政治に金を使わない」ことを実現させたいものである。

国際教養大学の試み

なかじまみね

中嶋嶺雄

(国際教養大学理事長学長)

この四月八日に開学した国際教

養大学（英語名は Akita International University）は、これまでの日本の大学にはない数多くの特徴を備えている。

それらの特徴をまず教育面から見てみると、全世界から募集した多様な国籍の教員による授業や公的な会議がすべて英語で行われていることである。やがて開講される中国語の授業も、英語で行われる。

入学式に先立って TOEFL（PBT）を用いて行われた新入生の英語能力テスト（ブレイズメント・テスト）で能力別に三段階にクラス編成された学生たちは、English for Academic Purposes と呼ばれる EAP I、II、III の英語集中課程の授業に早速打ち込んでいる。新入生の最高点は TOEFL で六〇〇点前後だったが、TOEFL は初めて受けたという学生が多かったのに、約一五%が五〇〇点以上であった。四八〇点以上の学生は、EAP III から始められるので、日本語表現スキルなどのコミュニケーション科目や

芸術・芸術論（音楽と演奏）などの基礎教育科目をすでに取り始めている。

日本の大学の多くは、能力に応じた教育を避け、外国語のように明らかに能力差がある場合でも、一律の授業を行っているのだが、国際教養大学の場合は、こうした能力別教育を最初から導入している。しかも、一クラスは最大規模でも十七、八人以下の徹底した少人数教育なので、教師は学生の学習発展の程度を手取るように把握できる。この場合、最初のクラス編成で EAP I に振り分けられた学生が萎縮してしまわないか心配されたが、そのような様子はまったくなく、ブレイズメント・テストも七・五週ごとに行われるので、勉強次第でその分だけ今後の成長が見込まれるのだと皆張り切っている。この連休中も、多くの学生が二十四時間開館の図書館（これも全国初の試みであろう）で深夜まで勉強していた。「英語で英語を学ぶのが本当に楽しい」「こんなに勉強するのは初めて」といった声を聞かされた。

「と」

このような勉強環境を可能にしている他の大きな特徴は、国際教養大学が新入生に全寮制を課していることである。今の若者に寮生活は向かないといった見方もあったけれど、一部屋を二人で区切って共用する個室全寮制ということもあって、明るく広いカフェテリアで三食が供される寮生活がとても楽しそうだ。自主的にサークルを立ち上げたり、先日の学生会の会長・副会長の選挙などは、何人かの候補者全員が英語でスピーチをして、会場を沸かせていた。

森に囲まれた広いキャンパスに沿って見事な桜並木があり、すぐ近くの森には水芭蕉の群落があつて白と緑のコントラストが美しく、前庭にはスマイレの花が群生しているといった、アメリカの「大学町」のような環境も学生たちの勉強意欲をかきたてているようだ。やがてキャンパスには、この六月

中旬からのサマープログラムに世界各国から留学生がやってくることになっており、秋学期からは正規の留学生が入学する。こうして国際教養大学のキャンパスそのものが、居ながらにしての異文化空間になろうとしている。

このようなキャンパス・ライフを支える職員も英語の高いコミュニケーション能力を備えている。最高倍率九五倍という競争を経て採用された優秀な職員ばかりで、総務主任は米コネル大学MBA、主任ライブラリアンは米カリフォルニア大学バークレイ校Ph.D.、若いカウンセラーは米コロンビア大学心理学MAといったように、日本の国立大学の多くの職員が殆ど英語ができないといった「知の鎖国」状況とはまったく異なっている。

全学生が一年間の海外留学義務、入学試験はすべてアドミッション・オフィスがする、教授会ではなく大学経営会議が教員人事を含めて責任を持つて決定するなど、全国初の公立大学法人

としての国際教養大学は、こうして全国各地から優秀な学生を大変な入試競争率（後期日程の志願倍率は四五・二倍）によつて迎えることができた。もちろん、大学の真価が問われるのはこれからである。

裏の顔をもつ音楽

福岡正夫（慶應義塾大学名誉教授）

音楽のことでこの欄に執筆をとのご依頼である。そこで何かそのための手掛りをもと思い、この一年間のクラシック音楽シーンを振り返ってみた。まずは日本初演の超大作とあつて、キローフ・オペラのプロコフィエフ「戦争と平和」の公演が心に浮かぶ。ゲルギ

エフ統率下の演奏もよし、また第一部、舞踏会あたりの曲づくりもこの作曲家ならではの切れ味があつて、存分業しませてもらったが、ただ後半戦勝の場になつて、これでもかこれでもかとはかり国威を宣揚されるには少々辟易した。スターリン治世下の旧ソ連にあつて、こうしたプロコフィエフの見え見えの姿勢とは対照的に、はなはだ複雑なスタンスをとり続けた極め付きの作曲家はおそらくシヨスタコーヴィチであつたらう。

いざさか手前味噌めくが、筆者はこのところ年一回銀座の田崎真珠ホールで、「私の音楽ゼミナール」の名の下に一時間あまりの話を私がし、ついでその話の主人公となる大作曲家の作品を一、二曲生演奏してもらふ会をやらされている。昨年は第十回目の節目にあたるので二十世紀を代表する作曲家をとという要望があり、たまたまこのシヨスタコーヴィチがテーマとなつた。私の話は「シヨスタコーヴィチ——そ

昭和36年10月30日 第三種郵便物認可 平成16年6月1日発行（毎月1回1日）

三田評論

M I T A - H Y O R O N

2004 **6** No.1069

特集 高齢社会のデザイン



慶應義塾

三田評論

2004
6
No.1069

特集 高齢社会のデザイン

慶應義塾